ヨオロツパ

三月二十二日羽田を立つて、五月十三日羽田へ歸つたのだから、五十日ヨオロツパにゐたわけだが、私は四十日だつたとばかり思つてゐて、人に五十日と言はれるまで、十日のまちがひに氣がつかなかつた。

國際ペン・クラブ東京大會の打合せと誘ひとが、旅行の目的ではあつたが、それは同行の松岡洋子さんが果してくれて、私には日本の日常からまつたく解放された、休日のやうなものであつた。生涯にはじめての休日であつたやうに思はれる。

私はどこの國のどこに來てゐるといふことを、忘れてゐるやうな時が多かつた。行く先き先き、ここにしばらく住んでゐたいやうに感じた。言葉は通じないのに、異國民のあひだにゐるといふ氣もしなかつたのは、短い旅のせゐであらうか。

エリオツト、モオリヤツク、マルロオ、シャンソン、シロオネなど、多くの文學者に會へたのは、ペン・クラブのための旅行だからであつた。自分一人の旅行であれば、會はうとも考へないだらうし、會ふこともむづかしかつただらう。私はペン・クラブに感謝しなければならない。エリオツトは大病の後であり、十月にロオマへ旅行するので、九月の東京大會には來られない。ま

た、モオリヤツクは咽の手術の後だから、醫者に相談するとのことだつたが、やはり日本行きのやうな長い旅行は止められたらしい。しかし、エリオツトもモオリヤツクも、日本へ行くといふ興味がないわけではなかつた。また、一度でもその人に會つたといふことは不思議な力で、ペン大會とは別の機會に、エリオツトもモオリヤツクも日本へ招きたいと思へてならない。

ロンドンでは、アンガス・ウイルソンとスチヴン・スペンダアとが、私たちのためにカクテル・パアテイを催してくれた。二人とも東京大會に來てくれることを、私は日本へ歸つてから確實に知つたが、二人に會つた印象が明らかなのは、迎へるのに親しみを感じる。私の旅行のはじめ、コペンハアゲンに着いた明る日、黄田公使にハムレツトの傳說の古城へ案內してもらつた歸り、作家のリンデマンが自宅へお茶に呼んでくれたが、この親日作家もデンマアク代表として、東京大會に出席するといふ通知が、最近日本ペン・クラブにはいつた。リンデマンは日本文學の英譯書をいくつか書棚から持つて來て話し、また、イギリスやアメリカの日本文學についての記事を切拔いてゐるといふ風だつた。

アンドレ・マルロオには、ペン大會と關係なく、小松清の紹介で會つた。マルロオが日本美術をよく理解してゐるのは、世界中の美術を古今にわたつて通觀しようとする、マルロオ自身の努力と達眼によることは言ふまでもないが、小松君が日本美術の資料をマルロオに送りつづけてゐるといふ補ひも少くないだらうと思ふ。かういふ個人と個人とのつながりも、文化交流に意外に大きい結果を生むのは、幾多の例がある。ミュンヘンでエリツヒ・ケストナアに會つた時、私は日獨文化協定があると言ふと、ケストナアはペエパア・プランだと皮肉つてゐた。

私は支度の間もないあわただしい旅立ちだつたし、飛行機の荷物に制限もあるので、日本文學、

美術、その他の資料を持つて行けなかつた。飜譯すべき日本文學を方々で聞かれても、その本を渡すことが出來ない。參考書なしでは確かな詳しい説明も出來ない。ヨオロツパでも日本文化にたいする關心の高まりつつあるのは、私の思ひがけないほどだつたが、向うの人達が日本文化を知る資料は貧弱なばかりでなく、最善ではなささうである。日本の在外公館にも、さういふ備へは乏しい。私がアメリカへ廻らないで歸つたのも、一つには資料を携へてゐないからであつた。

それにしても、せつかくのヨオロツパ旅行を、わづか五十日で切上げて來たのは、後から思ふと惜しいことをした。ペンの東京大會の準備は氣がかりだつたのだが、さて歸つてからその準備を進めてゐるといふ働きもしてゐないのである。ヨオロツパでは特になにを見ようといふ心構へもなかつたし、特になにを見て來たといふ土産もないやうだが、目を高くして見てゐたらしく、歸つて日がたつにつれて、暗くしめつた底へ沈められてゆくやうである。

（昭和三十二年八月）

ミユンヘン

河盛好藏氏との對談（小說現代「作家の素顏」）に、ミユンヘンの畫商で見たチチアンの繪の話が出たので、ミユンヘンを思ひ出した。

空港の稅關で、旅行カバンを開かせられたのは、ヨオロツパ諸國の旅に來てから、ミユンヘンが初めてであつた。夜着いた。稅關吏はドイツ人のあのいかつい體つきで、口少なに構へてゐる。カバンの中は別にあらためられはしなかつたが、ごつんと硬い印象を受けた。空港から町の宿にゆく道も、四月だが冬のやうに冷めたい月の光であつた。

着いたホテルがまた今出來の實用一方の建物で、部屋も白けてゐた。卓の表がガラス板で、置いたものがすべり落ちる。昨日までのパリのホテル、クラアリツジはやや古雅、優麗であつた。一人だけれども廣い部屋に飾りつきのツウインのベツドであつたのに、ここはシングルの殺風景なベツドであつた。ところが、あくる朝、窓のカアテンをひらくと、「絹絲のやうな春雨がしとしとと降つてゐた。」ああ「春雨」と思つた。日本の春雨を久しぶりで見たと思つた。私は關西の育ちなので、春雨には鄕愁がある。關東は雨もあらく、關西のやうにやはらかい雨はすくない。春雨は京都あたりの風趣と感じてゐる。それでも、私の若いころは、東京にもやはらかい春雨が降

つたやうにおぼえてゐる。しかし、いつのころか、東京あたりに春雨はほとんど降らなくなつたと私は思ふ。春雨が降らなくなつたと、私は人にも話してみる。私の主觀ばかりではなく、氣候が昔とは變つたのだ。春雨の降るやうな春が失はれたのだ。ミュンヘンの思ひがけぬ春雨に、昨夜からの味氣なさがやはらいだのも、日本でのこんな春雨偲びがあつたからだ。

私は日本茶を持つて、朝の食堂におりた。ミュンヘンは水もよささうだから、玉露も出るだらう。春雨がさう思はせた。ヨオロツパが初めての私は、玉露の小さい茶入れを幾つか持つて來て、みやげともし、自分でも入れてみたが、パリの水もロンドンの水も合はなかつた。番茶はまだましだが、煎茶はだめだと、人に教へられた。しかし、春雨のミュンヘンではと樂しみにして、私は食堂の給仕に湯をもらつたけれども、やはり玉露の味は出なかつた。連れの松岡洋子さんを呼ぶのもやめた。松岡さんは朝寢の私を待つことなく、朝飯はすませたことであらう。

ひる前、カアル・ハンザア社の編集長、ゲツペルト氏が宿へ迎へに來てくれた。町を出はづれて、林のなかの靜かな住宅地のやうなところに、その出版社はあつた。社もまことに靜かであつた。パリから連絡はとつてあるので、ハンザア社長と通譯とが待つてゐてくれた。英語の通譯で、つまり二重の通譯であつた。私の日本語を松岡さんが英語に通譯し、その英語を向うの通譯がドイツ語に通譯する。ハンザア氏やゲツペルト氏のドイツ語はその逆で、英語を通つて、松岡さんの日本語になつて來る。まどろつこしいながらに、話は氣持よくはずんだ。だいたい私は外國で外國人相手の方がよく話すやうだが、ハンザア氏らは日本人から日本の話を聞くのがめづらしいらしく、いろいろと質問もあつた。食事中も食後も話はつづいて、まだ殘り惜しいのか、明日も話を聞きたいから來てもらへぬかと、ハンザア氏は言つた。

心づくしの晝飯の席は、二階の應接間につづく廣間で、この二間とも壁にコロオの繪があつた。會社の部屋といふより、私宅のやうな落ちつきであつた。私はこの出版社から、八代佐地子さんの飜譯、シンチンガア先生（當時東京大學）の校閲で、「千羽鶴」を出してもらつてゐた。（後に「雪國」、「古都」も出版。）その縁で訪ねたのだけれども、松岡さんと私とは、東京で國際ペン大會を開く準備に、日本ペン・クラブの使者として來てゐて、西ドイツでは、ヘルマン・ヘッセかエリッヒ・ケストナアに會へる斡旋を、この社に頼んであつた。スイスのヘッセからはことわりの葉書が來てゐた。自分の肖像寫眞の繪葉書であつた。ケストナアはスイスから旅に出てゐて、歸りを待たねばならなかつた。

一昨年（一九五五年）と去年、トオマス・マンとハンス・カロッサとがつづいて世を去り、ヘッセはスイスに去つてと、ハンザア氏は嘆いてゐた。ハンザア社を出ると、そこの林のなかを歩いて、ゲッペルト氏夫妻が私たちをみちびいたのは、トオマス・マンの舊居であつた。戰災で壞れたのを復元したのだといふ。その家の前の道角に立つ、町名の指示標は、古いのを消した下に、トオマス・マン通りと書き變へられてゐた。

（昭和四十二年三月）

「昭和二十年の自畫像」と題し、志賀直哉、吉川英治、小泉信三、獅子文六、三好達治、舟橋聖一、田中美知太郎、井伏鱒二、石川淳、中野好夫、伊藤整、竹山道雄、河盛好藏、向坂逸郎、臼井吉見、市原豐太、高橋義孝、檀一雄、田宮虎彦、小山清、芳賀檀、吉田健一、青山二郎、三島由紀夫、久保田万太郎の二十五氏とともに發表された。

今日に至るまで、著者のどの刊本にも收められてゐない。本全集では、發表誌を底本として用ゐ、本文を作成した。

古典を讀む人々へ

「群像」昭和三十一年三月號（第十一卷第三號）に、「古典を讀む人々へ」と題する特集に、青野季吉、猪野謙二、梅崎春生、圓地文子、唐木順三、佐藤春夫、瀧井孝作、田宮虎彦、寺田透、暉峻康隆、戸板康二、外村繁、中野重治、中村眞一郎、三島由紀夫、武者小路實篤、山本健吉の十七氏とともに發表された。

今日に至るまで、著者のどの刊本にも收められてゐない。本全集では、發表誌を底本として用ゐ、本文を作成した。

ある日

「文學界」昭和三十一年九月號（第十卷第九號）に「エッセイ二十人集」と題する特集に、中山義秀、中谷宇吉郎、幸田文、石原愼太郎、荒垣秀雄、飯澤匡、田宮虎彦、高島達四郎、眞船豐、草野心平、吉川幸次郎、石塚友二、吉村公三郎、近藤啓太郎、吉田健一、小林勇、五味康祐、井伏鱒二、石川達三の十九氏とともに發表された。

今日に至るまで、著者のどの刊本にも收められてゐない。本全集では、發表誌を底本として用ゐ、本文を作成した。

なほ、本文中で言及してゐる執筆中の作品は、「女であること」（本全集第十六卷所收）である。

東西文化の架橋

「讀賣新聞」昭和三十二年一月一日（火）附朝刊紙上に「―新しい年への期待」と副題を添へて、發表された。「お坊ばあさん」（獅子文六）、「机の廣場」（吉川英治）、「あらたま文」（室生犀星）がともに收

められてゐる。同紙での表記法には、現代假名遣および新字體が採用されてゐる。

今日に至るまで、著者のどの刊本にも收められてゐない。本全集では、發表紙を底本として用ゐ、著者本來の表記法である舊に復して、本文を作成した。

ロオマの休日

「朝日新聞」昭和三十二年四月三十日（火）附朝刊紙上に、「ローマで」と副題を添へ、エリオットとともに撮つた寫眞およびモーリアックの寫眞（いづれも松岡洋子氏の撮影）の二葉とともに發表された。同紙での表記法には、現代假名遣および新字體が採用されてゐる。

今日に至るまで、著者のどの刊本にも收められてゐない。本全集では、發表紙を底本として用ゐ、假名遣を舊に復して、本文を作成した。

パリのマネキン

「朝日新聞」昭和三十二年五月十三日（月）附朝刊紙上に、「ローマで」と副題を添へて、發表された。同紙での表記法には、現代假名遣および新字體が採用されてゐる。

今日に至るまで、著者のどの刊本にも收められてゐない。本全集では、發表紙を底本として用ゐ、假名遣を舊に復して、本文を作成した。

ヨオロッパ

「新潮」昭和三十二年八月號（第五十四卷第八號）に發表された。

今日に至るまで、著者のどの刊本にも收められてゐない。本全集では、發表紙を底本として用ゐ、假名遣を舊に復して、本文を作成した。

讀書の姿勢

「新潮」昭和三十三年一月號（第五十五卷第一號）の卷頭寫眞は「讀書の姿勢」と題し、小林秀雄、中村光夫、竹山道雄、武田泰淳、幸田文、高見順、高橋新吉氏ら、および著者の計八名の思ひ思ひの讀書の姿勢が寫されてをり、それに各自が短文を寄せてゐる。

代假名遣および新字體が採用されてゐる。
今日に至るまで、著者のどの刊本にも收められてゐない。本全集では、發表紙を底本として用ゐ、假名遣を舊に復して、本文を作成した。

加賀まりこ

昭和四十年六月の日生劇場は、六月四日から二十九日まで、劇團四季による「オンディーヌ」（ジャン・ジロドオ作、米村晰譯）が上演された。加賀まりこが主演し、藤野節子、田中明夫、北大路欣也らが出演し、淺利慶太が演出した。そのパンフレットに寄せられた一文である。同誌での表記法には、現代假名遣および新字體が採用されてゐる。
今日に至るまで、著者のどの刊本にも收められてゐない。本全集では、發表誌を底本として用ゐ、假名遣を舊に復して、本文を作成した。

水郷

「週刊朝日」昭和四十年七月二日號（第七十卷第二十九號）に、「新日本名所案内」の第六十二回として、發表された。同誌での表記法には、現代假名遣および新字體が採用されてゐる。
『新日本名所案内』下卷（昭和四十一年一月三十日、朝日新聞社刊）は、由起しげ子氏を初め三十八氏が、昭和四十年一月十五日號から同年十月一日號までに發表した三十八篇を收めて刊行された。しかし、今日に至るまで、著者のどの刊本にも收められてゐない。本全集では、發表誌を底本として用ゐ、假名遣を舊に復して、本文を作成した。

美智子妃殿下

この文章は、はじめ「東京新聞」に二回にわたつて、次のやうに發表された。
（二八三頁七行目、「……多いのもふしぎであつた。」まで）
「東京新聞」昭和四十一年一月四日（火）附夕刊紙上に發表された。
（二八三頁七行目、「私は通夜の前の日、……」以下）
「東京新聞」昭和四十一年一月五日（水）附夕刊紙上に發表された。

同紙での表記法には、いづれも現代假名遣および新字體が採用されてゐる。
『落花流水』（昭和四十一年五月三十日、新潮社刊）に初めて收められた。のちに、十九卷本『川端康成全集』の第十二卷（昭和四十五年五月十日刊）にも收められた。
本全集では、十九卷本全集を底本として用ゐ、發表紙および初刊本を參照して、本文を作成した。

巨木

「小說新潮」昭和四十二年一月號（第二十一卷第一號）の卷頭の「今月の隨想」欄に發表された。
今日に至るまで、著者のどの刊本にも收められてゐない。本全集では、發表誌を底本として用ゐ、本文を作成した。

ミユンヘン

「立春」昭和四十二年三月號（通卷第二百號—二百號特集號、三月一日刊）に發表された。
今日に至るまで、著者のどの刊本にも收められてゐない。本全集では、發表誌を底本として用ゐ、本文を作成した。

旅信抄

「批評」第七號—春季號（昭和四十二年四月十日刊）に發表された。
『月下の門』（昭和四十二年十二月一日、大和書房刊）に初めて收められた。
本全集では、初刊本を底本として用ゐ、發表誌を參照して、本文を作成した。

北山杉

『小泉信三全集』月報第九號（同全集第十一卷所收——昭和四十二年十二月十日、文藝春秋刊）に發表された。同誌での表記法には、現代假名遣および新字體が採用されてゐる。
今日に至るまで、著者のどの刊本にも收められてゐない。本全集では、發表誌を底本に用ゐ、假名遣を舊に復して、本文を作成した。

川端康成全集第二十八巻

平成十一年十月二十日發行
著者川端康成
題字東山魁夷
發行者佐藤隆信
發行所株式會社新潮社
〒162-8711東京都新宿區矢來町七一　振替〇〇一四〇-五-八〇八
電話編集部(〇三)三二六六-五四一一　讀者係(〇三)三二六六-五一一一
印刷所株式會社精興社
製本所加藤製本株式會社
© Kawabata Yasunari Kinenkai 1982 Printed in Japan

價格はセット函に表示してあります。
亂丁・落丁本は、ご面倒ですが小社讀者係宛お送り下さい。送料小社負擔にてお取替えいたします。